

『グリーンインフラを活かした住みやすい都市づくり』

東京農業大学地域環境科学部造園学科 准教授 福岡 孝則 氏

<講師プロフィール>

ペンシルバニア大学芸術系大学院ランドスケープ専攻修了。

2012年よりFd Landscape主宰。神戸大学持続的住環境創成講座特任准教授。2017年より東京農業大学地域環境科学部准教授。

主な社会活動に、国土交通省・人口減時代における新たな国土利用管理（国土と自然環境）有識者委員、神奈川県都市計画審議会委員など。主な著書に『Livable Cityをつくる』（マルモ出版、2017）など。

主な受賞に、2015年度グッドデザイン賞（旧厚生省公務員宿舎のリノベーションプロジェクトであるコートヤードHIR00）がある。

はじめに

皆さんこんにちは。本日は、「グリーンインフラ」と「住みやすい都市」とをつながけながらお話しします。

私の事を簡単に紹介しますと、「パブリックオープンスペース」といわれる公共空間の計画や設計を専門としています。またグリーンインフラをテーマに研究なども行っており、著書もいくつか出しています。社会的活動として講演や、縮退都市の中の空地をどのように考えていくかなど、様々なまちづくり関係の委員会にも関わっています。その傍らで自分自身のプロジェクトを動かしつつ、研究と教育、実践とをうまく回していくことを意識しています。

1. リバブルシティをつくる

(Creating Liveable city)

まずはじめに「住みやすい都市」ということに関して「リバブルシティ」の話をします。「住みやすい都市」というのは新しい概念ではなく、昔からある非常にオーセンティックな概念です。「リバブル」というのは「住みやすい」、「快適な」、「居心地の良い」といった意味ですが、「リバブルシティ」という概念は、都市を経済力や利便性、競争力だけではなく、そこに働く人、生活する人たちが様々なライフスタイルを選択しながら住み続けることができる都市、というように定義付けられています（図表1）。

非常に曖昧で広い概念ですが、例えば熊本を住みやすい都市にしていくといったときに、どのような都市の戦略を立てていくのか、ただ熊本に移住してきた人に交付金を出すような目先の話ではなく、どのようにして「住

みやすい都市」をつくっていくのか、という事が非常に重要なことだと思っています。

(図表1)

Livable=Live + able

「住みやすい、住むのに適した、快適な」

Livable City リバブルシティ

リバブルシティとは、都市を経済成長、利便性や競争力だけで考えるのではなく、そこで働き、暮らす多世代の人たちが、「文化・社会」「健康」「環境」など多様なライフスタイルを選択しながら、快適に「住み続けることができる」のかを考えるためのコンセプト

私が「リバブルシティ」という言葉に出会ったのは、1990年代後半からアメリカの都心部で、沢山の廃れた公園や使われなくなった公開空地などのオープンスペースの再生に携わっていた時です。その頃、住宅政策の転換の影響もあり、郊外の庭付き一戸建て住宅に住み、毎日1時間ほどかけて車で都心部に通うライフスタイルから、街中で利便性の高い住み方、もう少しコンパクトな住み方へと変化が生まれていました。このように街中に暮らすと庭を持てませんので、それに代わるものとして行政主導で屋外の公共空間の再生、再整備をしていく流れの中で私は仕事をしていました。例えば、歩行者空間でウォーカビリティ（歩きやすさ）を追求した再整備や、誰にも使われていない公開空地をどのように人が使いやすいように改修するか、といったことに取り組む中で、これからの時代、「住みやすい都市」をつくっていく上で屋外の公共空間というものが非常に重要になると体験的に理解をしてきました。日本の街中でも中心市街地や都心部への人口集中がどこでも起きていますが、そうした現

象に対して私たちの専門分野からお話をしたいと思えます。

図表 2 は、「リバブルシティ・ランキング」を取りまとめたものです。世界には様々な都市のランキングがあります。私が注目しているのは、例えば「グローバル・リバビリティ・ランキング」で、イギリスのエコノミスト誌が作っている世界のリバブルシティ・ランキングの指標です。ここで選ばれた都市は、主に欧米の都市が多いのですが、どの都市をリバビリティの観点からランクづけすることで、企業の役員がどこに住むか、新しい支社をどこに開設するかなどの参考として始まった信頼性の高いものです。それから、表の 3 番目に「クオリティ・オブ・ライフ ランキング」というものがありますが、これは、イギリスのモノクル社という出版社が出している、都市の生活の質のランキングです。このランキングでは、東京や福岡、京都などが近年かなり上位に食い込むようになってきました。日本の都市が持っている安全性や住みやすさ、コンパクトな魅力、人の繋がり、食の文化の質の高さなどは、世界と比べても遜色ない魅力をもっていることの現れでしょう。それから、熊本市の皆さんが熊本と日本の他の都市を比べるだけではなく、世界の都市と比べたときに熊本はどうあるべきかという性格付けや、これからどうありたいかということが見えてくるのではないかと思います。

(図表 2)

リバブルシティ ランキング(住みやすい都市ランキング)				
都市のランク	都市のランク	都市のランク	都市のランク	都市のランク
Global Livability Ranking (2014年度)	Quality of Living Ranking (2014年度)	Quality of Life Ranking (2014年度)	Global Livability Ranking (2014年度)	Quality of Living Ranking (2014年度)
1. Zurich	1. Zurich	1. Zurich	1. Zurich	1. Zurich
2. London	2. London	2. London	2. London	2. London
3. Tokyo	3. Tokyo	3. Tokyo	3. Tokyo	3. Tokyo
4. Sydney	4. Sydney	4. Sydney	4. Sydney	4. Sydney
5. Melbourne	5. Melbourne	5. Melbourne	5. Melbourne	5. Melbourne
6. New York	6. New York	6. New York	6. New York	6. New York
7. San Francisco	7. San Francisco	7. San Francisco	7. San Francisco	7. San Francisco
8. Paris	8. Paris	8. Paris	8. Paris	8. Paris
9. Seoul	9. Seoul	9. Seoul	9. Seoul	9. Seoul
10. Hong Kong	10. Hong Kong	10. Hong Kong	10. Hong Kong	10. Hong Kong
11. Taipei	11. Taipei	11. Taipei	11. Taipei	11. Taipei
12. Singapore	12. Singapore	12. Singapore	12. Singapore	12. Singapore
13. Osaka	13. Osaka	13. Osaka	13. Osaka	13. Osaka
14. Vancouver	14. Vancouver	14. Vancouver	14. Vancouver	14. Vancouver
15. Auckland	15. Auckland	15. Auckland	15. Auckland	15. Auckland
16. Wellington	16. Wellington	16. Wellington	16. Wellington	16. Wellington
17. Brisbane	17. Brisbane	17. Brisbane	17. Brisbane	17. Brisbane
18. Perth	18. Perth	18. Perth	18. Perth	18. Perth
19. Melbourne	19. Melbourne	19. Melbourne	19. Melbourne	19. Melbourne
20. Sydney	20. Sydney	20. Sydney	20. Sydney	20. Sydney

図表 3 はモノクル社のランキングのチューリッヒという街を紹介する動画の一瞬を切り取ったものです。ここで見せているのは、建物がほとんど真っ白で背景として写っており、河川、それからオープンスペースのネットワークがわかりやすく「見える化」され、評価されてい

ます。その他、公共交通やナイトライフの質、本屋の数、コーヒーショップの数といったもので指標付けがされている点に興味深い点です

(図表 3)



世界には、例えばメルボルンであれば「フェデレーション・スクエア」、ニューヨークであれば「タイムズ・スクエア」など、その都市を代表する様々な屋外の公共空間があります(図表 4)。それが熊本にとっては一体どんな場所なのか、またそういったものがなければどのようにつくっていくのか、といったことを考えながら、様々な街の屋外公共空間から都市を考えるということに取り組むとよいのではないかと思います。

(図表 4)



都市を考える時、市長や市の幹部は、世界の他都市に向けて自分たちの都市をアピールする観光政策やブランディングといった戦略付けをし、外向けに一生懸命頑張ります。しかし実体験として、観光客はその町にしかないものであるとか、その町に住んでいる面白い人、その街にしかないユニークなビジネスやデザイン、プロダクトなどに興味を抱きます。世界中どここの町へ行っても同じフランチャイズの店やレストランなどがありますが、

その場所にしかない魅力は生活する人から生み出されます。「リバブルシティ」とは何か、というのは少し難しい課題ではありますが、外に向けた戦略付けとそこに生活する人の間に住みやすい都市の鍵があるのではないかと考えています（図表 5）。

（図表 5）



「リバブルシティ」をどのように考えていったらいいのかということで、例えば健康的な都市、他にも安心安全、文化的、社会的、歴史的、生態的な都市など様々な指標があります（図表 6）。

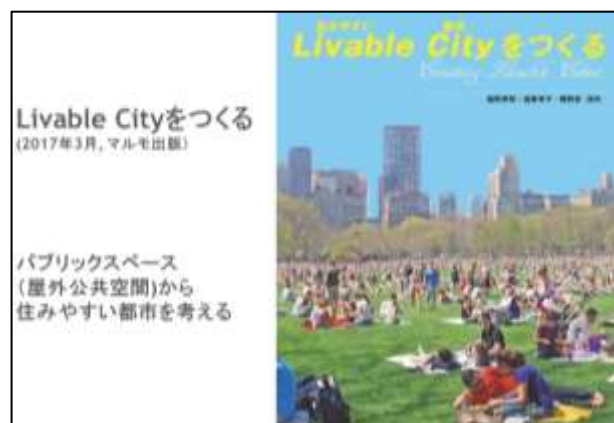
（図表 6）



これを一つに絞り込んでということではなく、20%くらいは健康的なイメージとみどりが基調となつてとか、ここは 50%くらい重要性があるとか重み付けをしていくことがビジョンを作る上では大事だと考えています。

『Livable City をつくる』（マルモ出版）は事例やリバブルシティに資する様々な屋外公共空間のプロジェクトなどへのインタビューを集めて一冊の本にしたものですので参考にして頂ければと思います（図表 7）。

（図表 7）



2. パブリックスペース

(Public Space for Liveable City)

次に、パブリックスペース、オープンスペース、といった屋外の公共空間が私たちの都市の生活の住みやすさにどのように寄与できるのかについてお話ししていきます。私自身は、これからの時代の都市の魅力というのは、どんな立派な建物が建っているかとか、立派な橋があるかではなく、都市の屋外空間こそが住みやすい健康的な生活を送るための鍵になると思っています。毎日の生活の中で、ちょっとした自然や余白の中での軽い運動や、人々との出会いといったような、屋外空間の魅力を高められるかが、ランドスケープアーキテクトである私たち、屋外空間を設計する者の使命だと思っています。都市には様々な屋外公共空間があります。例えば、写真 1 は神戸市の東遊園地という都市公園です。

（写真 1）



写真 2 は、リヨン市のウォーターフロントです。ただ川が流れているだけではなく、そこには散歩する人がいて、木陰で川の水面をゆっくり眺められるような場所が

あり、おしゃべりをしたり、ゆっくり本を読んで過ごすこともできます。

写真 3 は、集合住宅の中庭です。中庭は公共空間ではなく半公共空間かもしれませんが、子供が遊んだり、毎日散歩したり、ここで野菜を育てたりとそうした生活に近いところにある小さなオープンスペースです。

写真 4 は、「大手町の森」といって、地下に駐車場が入っている人工地盤上の森です。ここに本当に小さいベンチが何基かあるのですが、昼休みになると人が殺到し、場所取りをするような光景に出くわしたことがあります。都市の中で働くということは非常にストレスが高いものです。こうした空間を働く場所の近くに用意していくことが、長期的には魅力的な人材の獲得や、生産効率の向上につながり、新しく創造的に考えることができる環境を作るなど、オフィスの環境も変わることが予測されています。

(写真 2)



(写真 3)



(写真 4)



写真 5 は、メルボルン市内の歩行者空間と道路空間で、非常にうまく設計されており、路面電車と車、自転車と歩行者が共存する街路空間となっています。歩行者空間の中には、滞留空間と人の動きが流動的な場所があり、この街の公共交通と人、自転車それから車が良いバランスでこの道を共有しています。これがこれからの道路の姿かもしれません。私の熊本の第一印象は道路の幅が広く、車が中心の街だと感じました。市の中心部や交通のあり方というものも、今後いろいろ考える余地があると思います。写真 6 は、メルボルン市内にある建物の足元の公開空地で、このように屋外空地と建物の低層部にカフェがあり、こうした空間から人々の利活用が滲み出しています。写真 7 は、町田市役所の屋上で、ここは朝から夜まで市民が出入りして、昼食や軽食を取りながら憩えるような空間となっています。

(写真 5)



(写真 6)



(写真 7)



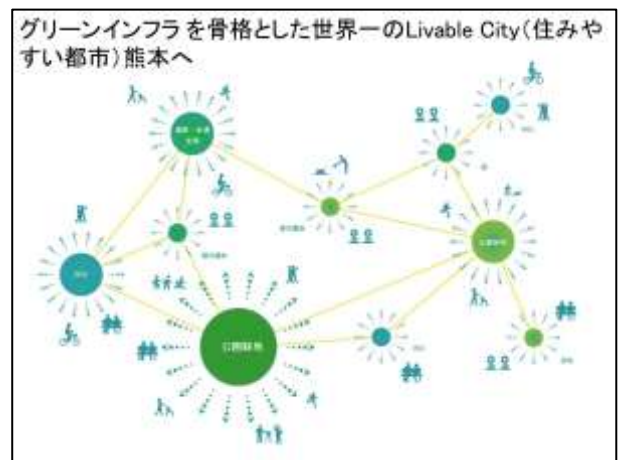
屋外の公共空間というのは、ランドスケープの人も、建築の人も、それから都市計画の人も関われる分野です。そのような事を念頭に、様々な分野で領域横断的に活躍している方達の話をもとめたものが『海外で建築を仕事にする 2 都市・ランドスケープ編』（学芸出版社）です。これは若い学生さんや若手の専門家の方に読んでいただいている本で非常に良い内容となっていますので、こちらもぜひ読んでいただければと思います。

このように屋外の空間はさまざまな形をもちます。セントラルパークや、ボルドーの川辺のように 100 年、200 年と長く続くような魅力的な屋外空間もあれば、1 週間、1 年だけの高架下の空間や、非常に小さい暫定的なパブリックスペースというものもあります（写真 8）。こうした空間の一つ一つは非常に小さい場所ですが、そうした空間を活かし上手く連関させ都市の骨格とすることで、世界一住みやすい都市熊本へとつながるのではないかと考えています（図表 9）。

(写真 8)



(図表 9)

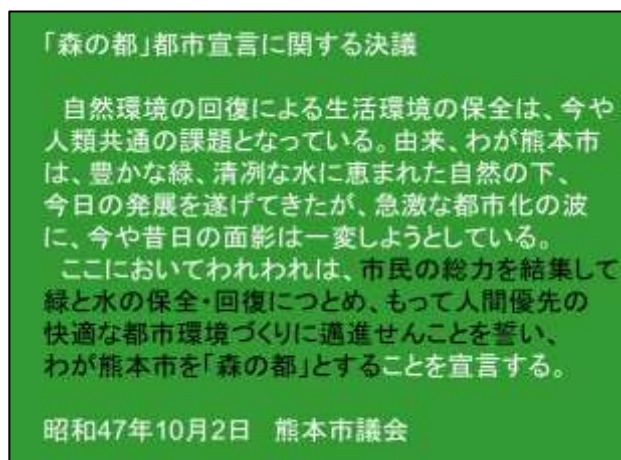


図表 10 は、熊本市議会の「森の都」都市宣言に関する決議です。今回熊本での講演に際し、緑の基本計画などを読ませて頂いた中で、最初に目に留まったのがこの文書でした。ここに「市民の総力を結集して緑と水の保全回復に努め、もって人間優先の快適な都市環境づくりに邁進せんことを誓い、我が熊本市を森の都とする」と宣言されています。昭和 47 年に、この「森の都」宣言が決議されてから、今熊本市でどんなことが起きているのかをおぼろげながら頭の中に入れつつ、考えてみましょう。

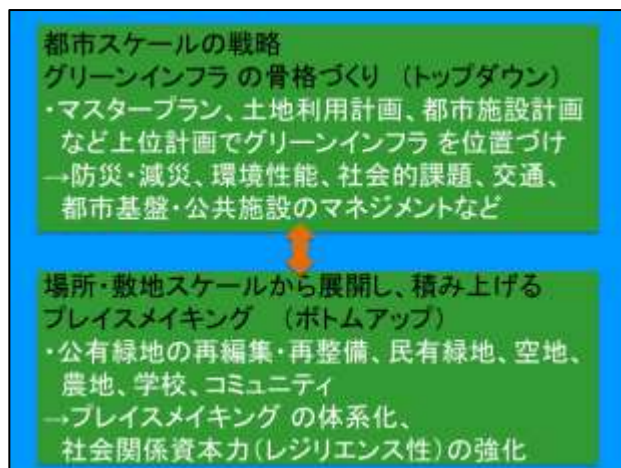
図表 11 のように、都市計画など大きいスケールで、どのように都市の緑地やオープンスペースを考えていくかという戦略を立てる時に、例えば熊本だと緑の基本計画では、二重の緑の輪の中に熊本があり、その中に白川が流れていて、水と緑が豊かな都市だといった都市の骨格を抽象的に表したものがあります。同時に例えば江津湖ですが、夏の江津湖の冷たい湧水の中で沢山の子供たちが遊んでるような場所の体験や、花畑広場では様々なイ

ベントや実験が繰り返されていると聞きます。こうした多様なスケールの屋外空間をどのようにつなげていくかが私自身の常日頃の疑問点でもあるわけです。

(図表 10)



(図表 11)



これを言い換えますと図表 12 の上半分に都市スケールの戦略や、グリーンインフラの骨格作りと書いていますが、行政として、もしくは市長のトップダウンで「森の都」を本当に作るのであれば、マスタープランや総合計画、それから上位計画の中で、どのようにしてこの緑や緑地、グリーンインフラというものを位置づけていくかが非常に重要だと思います。近年このグリーンインフラも上位計画の中、特に防災減災や下水道行政の中での位置付けが始まっています。同時にこうした計画は、市民にとってはほとんど理解できないものですが、場所や敷地のスケールから展開して積み上げるプレイスメイキングの、一つ一つの小さい場所を通してならば市民やそこで生活する人が体感できるのです。例えば、公有緑地の質を高め、小さい空地や農地、学校の周りの空間、そう

した空間がもう少し体系化されることで、そこに関わる人たちも沢山いるわけですから、社会関係資本力の向上や、コミュニティの力を上げるということに繋がり、ひいては非常時に大きな力を発揮することに繋がると思っています。こうした二つのギャップをどのように捉えるかについて、ぜひ今日考えていただきたいと思います。

(図表 12)



3. パブリックスペースを核に都市を再編集・再整備 -南町田拠点創出まちづくり-

今日は私自身が関わってきたプロジェクトを中心にお話しします。まず、比較的規模が大きいオープンスペースを核とした都市の再編集、再整備のプロジェクトで、東京都町田市にある「南町田拠点創出まちづくり」というものです(図表 13)。東急電鉄によって田園都市構想の下に作られた田園都市線の終点から 2 番目の駅が南町田駅で、駅前のグランベリーモールという商業施設と鶴間公園の一体的再整備プロジェクトです。鶴間公園は町田市にある既存の運動公園(約 6ha)です。隣接する境川は非常に脆弱で、沢山雨が降るとすぐに水位が上昇するのが課題です。新しく建設する地下調整池の上部を都市公園に組み込み、約 7ha の運動公園として再整備しました。一方、商業施設は約 6ha で、鶴間公園と商業施設の間にあった道路を廃道にし、その土地利用を住宅地に変え、その上では民設民営でスノーピー美術館を誘致しました。ここでは、教育委員会や子育て支援の部局が関わり、民設民営で子育て支援関連施設を建て、子どもの英語の教育プログラムや、子どもたちの活動の場を同時につくる構想を進めています。民間企業の力も活かしつつ、公益性を高めることを目指しています。

(図表 13)



こうしたプロジェクトは前例がなかったのですが、私自身もこの公園の基本計画、基本設計から実施設計監修と、商業施設は構想から実施設計まで関わっていましたので、両方のプロジェクトを一体的に考えるという機会に恵まれました。このプロジェクトは、とにかく真ん中に新たな鶴間公園を据え、地域の価値を上げる、地域の魅力を高めるためにオープンスペースを起点にして考えましょうということを一生涯やってきました。

それから物理的に商業施設も公園と繋がりますので、公園とショッピングモールが一体的になった時にどんな効果がつくれるのかということをコンセプトとして毎回毎回考えていきました。コンセプトとしては、町田は東京でも少し郊外にあり、斜面林が残り、周りには沢山農地が残存していますが、そこに住んでる人はほとんどそのありがたみを感じていないといえますか、豊かすぎるだけに自然に対してあまり興味のない人がいるといった町です。多摩丘陵の自然をどのように取り込むかということ、運動公園では、それまでのサッカー競技場と野球の練習場、テニスコートなどの競技スポーツ施設以外は、あまり使われていなかった状況から、もう少し多機能化し、誰もがいろいろな健康活動に勤しんでいけるような空間に変えるということを計画の中で進めていきました。

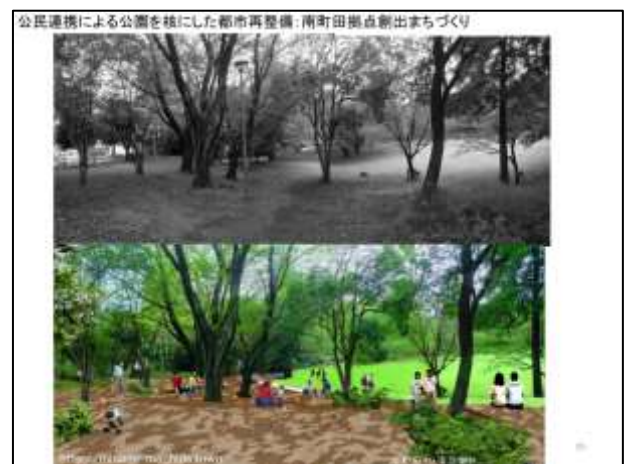
図表 14 で示した「アクティブ・インクルーシブ」というのは、誰もが健康になることを謳った新しいデザインの手法で、どんな人もここで健康やスポーツに勤しめるということです。駅から徒歩 5 分圏内にこれだけの規模の公園があるのは都心では珍しいので、パークライフを考えていくこともコンセプトにしていきました。

(図表 14)



この公園は開園して約 40 年経っており、斜面の多くが踏圧により裸地化し、雨が降ると表土の流出がおきていました。既存の樹木や芝生広場などを活かし、地形広場を創出したり（図表 15）、ケヤキ並木の魅力を生かして滞留空間を付加したり（図表 16）と、こうした屋外公共空間の再編集を通して、魅力を生み出していきました。

(図表 15)



また公園の中には、かつての二次林、里山のような樹林が大きく育ってしまったものがありましたが、その間を編集し、もう少し光が入って豊かな植物が育つようにしたり、最低限のアクセスができ、ここでトレイルランができたり、小さい森の遊び場をつくったりしています（図表 17）。ここは運動公園ですから、もちろん多目的広場があり、その周りに約数百mのトラックを作り、夜も安心して女性もジョギングやウォーキングができる空間にしています（図表 18）。ほとんどの市民にとっては、競技スポーツより歩くことや軽く走ることに一番ニーズがあります。ただ街の中でそれをやろうと思うと、魅力

的な場所には中々ありませんので、そうした空間をつくっています。図表 19 は、調整池上の多目的スポーツ広場ですが、その周りにも回遊性を出し、ジョギングや運動前のアップをするような空間を設けています。

(図表 16)



(図表 17)



一つの目的だけでなく、その目的×αで何かできることがある場所を作ろうとすることで公園の中にも自然と賑わいができると考えています。

公園計画の中で、非常に難航したのは市民の合意形成でした。市の公園計画の進め方に疑問を持つ市民の方も多く、今までずっとブラックボックスで情報も開示されず、ただ商業施設ができるので木が何本も伐採されるということに対し非常に多くの疑問の声がありました。実際に伐採する木もありましたが、具体的にどの木をどのように切るのか、もしくはどのように木を残すかということを、現場で歩きながら市民の皆さんと見ました。実際に森の生態系に詳しい専門家にも一緒に来ていただき、森というのは、ただずっと放置して人間の手を入れない

のは良くなく、時々伐って更新し、光を入れるなど、そのようにして生きている仕組みであることを説明し、その中で将来の樹林の性格づけなど、だんだんと皆さんと考えを一緒に固めていきました(図表 20)。

(図表 18)



(図表 19)



それから、ここは運動公園ですので、どのような新しい運動やスポーツが導入できるか公園を作る前に市民の皆さんに実際に体験して頂きました(図表 21)。ノルディックウォークというのは、ストックを補助的に使った歩行運動です。他にも公園でヨガを実際に体験する中で場所のあり方を想像したり、共有する現場体験型のワークショップを何回かに分けて実施しました。ワークショップというと通常、行政は近隣の自治会や町会に声をかけ、限られた人を集めてワークショップを開催するケースが多いです。市民意見はそれで集約したと整理したり、パブリックコメントを短期間に実施するだけで「意見を聞きました」とします。公園の計画や設計の面白いところ、難しいところは、市民は本当に多様な意見を持って

いるということです。公園の計画・設計プロセスをオープンにすることで私たち自身も非常に勉強になりました。

(図表 20)



(図表 21)



その地域で生活し、公園を使ってる人たちが、普段どのような使い方をしてきたか、公園の再整備にどのようなことを期待して、何を課題と思っているかなど多様な声をできるだけお聞きして、計画条件の一部として反映していくことを強く意識しました。加えて、公園再整備後の管理運営を見据えての戦略も持っていました。通常の公園の管理運営では行政が直轄で管理、もしくは指定管理者が管理運営を担います。公の誰かが管理している場所となると、やはり公園に落ち葉が落ちていると、掃除しろと市役所に抗議の電話をする住民もいます。空間は整備されて立派になっても、管理運営でだめになる公園も多くあります。鶴間公園では、どのようにして皆でこの公共空間を育んでいくかみたいなことを話しました。約 2 年前ですが、市民の方達が半年かけて主体的に企画

を立てて準備をし、秋に収穫祭的な「公園のがっこう祭」を開催しました（図表 22）。

(図表 22)



公園の中で子どものアート教室や、地場の野菜でピザの調理、簡単な音楽イベントなどを 7 グループぐらいで行いました。最終日には数百人くらいの来訪者があり、非常に良い雰囲気の中、終えることができました。私は公共空間ができた後に、どのようにして人が毎日の生活の中で関わり続けることができるかは、中々デザインできないと思っています。しかし、予め公共空間を育てる体験を繰り返していく中で、やはり人に継続的に愛される場所を作っていく、編集をするという管理運営の能力は非常に重要だと改めて実感しました。「公園のがっこう祭」ではイベントだけでなく、模型を共有して計画設計の進捗を報告しつつ意見を頂いたり（写真 9）、色々な市民のプレイヤーと出会うこともでき、管理運営の方針を考える意味でも勉強になりました。

公園を起点にまちを歩く公園のつくりかた

<http://minato-machika-town>

公園のつくりかた

同じような形のプレイスメイキングに他自治体でも関わってきましたが、場所によって地域や人の性格も違います。そこに住む人、使う人の気持ち活かして公園を育てる動きにつなげられないか、を日々模索しています。

公園や緑地というと民間企業の方や、地元経済界の方は公共の空間だし、自分たちにはあまり関係ないと思われるかと思います。しかしながら、民間企業こそオープンスペースをつくることに積極的に関わるべきです。私が設計者として関わった事例をご紹介します。写真 12 は、東京都港区にある旧厚生省公務員宿舎で、クライアントは不動産会社、いわゆるディベロッパーで土地と建物を持っています。駐車場と築 43 年の当時としては頑丈に作られた RC 造の建物で、構造強度が高いということで、この建物を生かして何か新しいリノベーションのモデルを作りたいと、建築家を通じて相談がありました。

た状態でした。しかし、初めてこの場所に立ったとき、
 こういう場所にできるんじゃないかという、ひらめきの
 ようなものを強く感じました。この建物は、南向きに配
 置されているのですが、バルコニーと屋外空間のあいだ
 に大きな分断感があり、どのようにこの 1 階部分を屋外
 に対してひらけるのか、というのが一つの課題として上
 がってきました。プロジェクト構想段階で施主や将来こ
 の建物に入るテナントのオーナーなどと話し合いながら、
 ここで健康やアウトドアなど屋外で体を動かすことをビ
 ジネスにできないかということを話し合いました。「そ
 れはすごくいいですね、まだ誰もやったことがないので
 ぜひやりましょう」という事になりました。



コートヤードHIROO URBAN COURTYARD
国庫省官舎跡・駐車場を改修、セミパブリックスペースへ

CREATE SETTINGS
FOR PEOPLE

人間のための都市の舞台をつくる

10

(図表 23)



(写真 11)



植栽も元官舎の庭でしたので、夏ミカンの木やソメイヨシノなど魅力的な樹木も沢山生えていました。これを編集し、新しい植物を加えていきました。この場所は、民間がつくるパブリックスペースと記しています。民間の敷地を月に数度ひらき、パブリックスペースをつくりだしています。所有が公共だからパブリックスペースではなく、多くの人に開かれた、オープンでソーシャルな場所をつくることを目指しています。その内の一つが「ファーストフライデー(First Friday)」といって、毎月第1金曜日にこの「コートヤードHIROO」全体を開きます。シェアオフィス、レストラン、ヨガのスタジオなどで働いている人たちがプレイスメイカーとなり、暫定的なパブリックスペースをつくりだします。4月は桜をテーマにしたプログラム、夏は地域の子どもたちも参加する江戸ウィーク、夜のアウトドアキッチンやヨガなど、工夫しながら様々な使い方を多くの人たちにも体験してもらうことを目指しています。

写真 12 は、春のファーストフライデーで、水墨画のアーティストを集め、桜の木の下で即興で桜の絵を描いてもらい音楽を楽しみました。夏のファーストフライデーでは、地域の町会や子育て層の方にお声がけします。小さいプールですが子供は大喜びです。子供たちが走り回っているかたわらで大人がお酒を飲みながら楽しむような夏の夜の時間を過ごすことができます(写真 13)。コートヤード HIROO では、このようなプレイスメイキングの取組を 5 年間続け、今年で 6 年目に入ります。今後の課題としては、月に数度のイベントや定番のプログラムだけではなく、「日常を豊かに」していくことです。ここで働き、学び、遊ぶ人たちの日常をより魅力的にするために、屋外空間の使い方やコートヤード HIROO に関わる人たちのコミュニケーションのあり方も今考え直しているところです。

(写真 12)



(写真 13)



新しい広場や公園をつくる時に、一生懸命イベントやプログラムを展開して人の賑わいを作らないといけない

と思いがちですが、賑わいを作ることが目的になってしまっ
てはいけないと思います。自然と自分たちが、市民の方
たちがそこで何かをしたいと思えるような場所でない
といけなし、多様な利活用やふるまいを引き出すよう
なマネジメントが必要ではないかと考えています。

熊本市は公園系の職員が 6 名しかいないから大変だ
という話も聞いていますが、パブリックスペースは公園課
だけが担うものではありません。これから日本中でどん
どん土地が空いていきます。工場跡地や空地、現在は道
路ですが将来車が減れば、そこはオープンスペースに再
生できるかもしれません。そうした場所を 100 年かけて、
こういう空間にするんだ！という姿勢も大事ですが、明
日から 1 週間だけ公園のように駐車場が使えないか？な
ど、暫定的なプロジェクトや社会実験も現在、日本の中
で沢山実施されています。本来公園やオープンスペース
でない場所をどのようにして、小さな場所として実験的
に動かしていくかという戦略も、現在の都市には 非常
に重要な視点だと思っています。

5. ブラウン・フィールドから新しいパブリックスペースへ

(写真 14)



写真 14 は、ニューヨーク市のブロードウェイという道
です。元々全て道路だったのですが、当時のブルームバ
ーグ市長の英断で半分を暫定的に舗装を変え、仮設的に
動かせる家具類を置き、広場として使用する社会実験を
実施しました。道路交通局の辣腕女性ディレクター、サ
ディック・カーン氏がキーパーソンです。暫定的な広場
における人の滞留時間や、活動などが丁寧にモニタリン
グされました。最初は周辺店舗の売上不振などが懸念さ

れていましたが、結果的には車の交通量を減らしてウォー
カビリティ（歩きやすさ）を高めたことで、店舗の売り
上げが向上しました。人が人を呼び、ここに人が沢山集
まり、ここで過ごす時間が増え、滞留時間が増えれば、
そこで食べ物を食べるなど落とすお金も増えるというプ
ラスの連鎖がこの場所の成功につながり、最終的にここ
は本設の広場として整備されるわけです。

写真 15 は、皆さんご存知かもしれませんが、ハイライ
ンというニューヨーク市の高架貨物線の跡を都市公園に
再生したものです。私が学生の時はまだ高架跡で、デザ
イン演習の設計課題になったりしました。ここが現在は
年間約 600 万人の観光客や利用者を集める都市公園とし
て再整備されました（写真 16）。この公園は決して幅も
広くないのですが、ニューヨークの街を少し高いレベル
から空中散歩して眺められるという非常にシンプルな構
造になっています。当初はすでにこの高架の撤去は都市
計画決定されており建物が建設される予定でした。それ
に疑問をもった 2 人の市民が「フレンズ・オブ・ハイラ
イン」という組織を立ち上げ、ロビー活動を続けました。
アイディアコンペの実施や展覧会などを通して多くの賛
同者を集め、最終的に都市計画決定が覆り、市長や政府
の応援、多くの市民からの寄付金などの力で夢が現実と
なったのです。

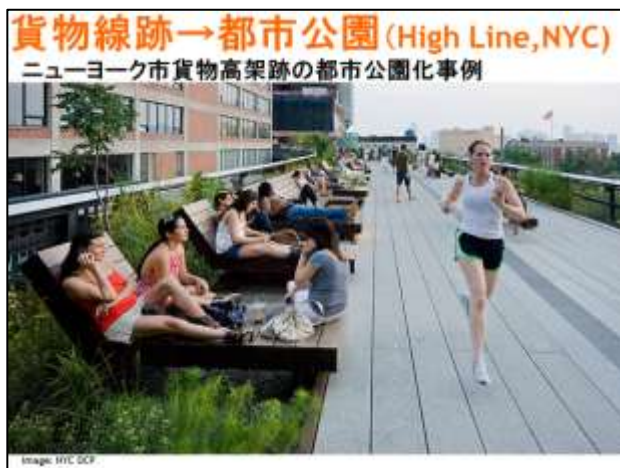
(写真 15)



現在も、このフレンズ・オブ・ハイラインという組織
が、この公園の管理運営をしていますが大変な黒字です。
中には、キッチンカーより小さい、日本でいうところの
人力車みたいなものでコーヒーを出したり、お土産屋や
軽食を食べるところがあります。それから少額の寄付も
できるようになっています。ですから、大変沢山の税金

が集まって、ここの公園の経営は非常に健全です。アメリカの場合はセントラルパークやハイラインのように非常に儲けている公園と、全然稼げない公園の格差が問題になってはいますが、このハイラインは一つの良い事例だといえるでしょう。

(写真 16)



アメリカ・デトロイト市には、「ダウントウン・デトロイト・パートナーシップ」という、その土地の所有者たちが自分たちで会費を集め組織した民間のエリアマネジメント組織(BIZ)があります。このダウントウン・デトロイト・パートナーシップの事業の一つに、夏の間だけ、駐車場と使われていない道路空間を活用する「サマー 스트リート」というものがあります(写真 17)。舗装に簡単なペイントを施し、子どもたちがバスケットボールをできるスペースを保険会社がスポンサーとなり運営しています。デトロイト市の街中には元々あまり人がいなかったのですが、このように夏の間だけ場所を開くことを民間企業がサポートしているという事例です。

(写真 17)



写真 18 は、すでに街の中にある公園の敷地に暫定的に砂場を作った「BEACH PARTY」というプログラムです。家具は全部イケア (IKEA) という家具会社が協賛・提供し、奥にコンテナを使ったレストランやバーがあります。親がくつろいでいる間に子ども達は砂場で遊べるような空間になっています。

(写真 18)



写真 19 は、ニューヨークのチェースマンハッタン銀行が、自社ビルの 1 階と公開空地を自主的に改修した事例です。建物は日本の企業の社屋のロビーのように重厚な石の階段と大理石のエレベーターホール、人が誰もおらず使いにくい空間だったのを改修し、いくつかのレベルで町の人がくつろげる滞留空間や、オフィスの人がここに降りてきて働くことのできる場所を作りました。魅力的な場所ができると、オフィスからも沢山人が降りてきて、様々な活動が表出しはじめます。これは銀行が自主的にパブリックな場所を創出することで、地域の魅力を高めたり、それから楽しい働き方を模索する姿勢を表現しています。同時に、銀行の価値をブランディングしているともいえるでしょう。時折ここで寝ている人や少し怪しい人がいる場合もありますが、開くことでまちや、より多様な人々とのつながりが期待できるのも建物の低層階や屋外空間の魅力かと思います。日本のほとんどの企業は建物の中に閉じこもっていますが。

写真 20 は、様々な形をもつ暫定的なパブリックスペースです。左上の写真は今後再開発が起きる予定の場所で、広場的な空間を創出し、開発の前から人々に使ってもらおうと整備されたオープンスペースです。

右の写真は「パークレット」というもので、道路上の縦列駐車空間が無駄なので、その空間を夏の間だけ公園のように暫定利用するものです。店舗主たちが何店舗かで組合を作り、パークレット整備の申請を行います。行政側はこの場所の占有料を徴収し、初期投資の一部を負担しますが、維持管理は店舗側が担います。パークレットにより売上げが上がる店舗は取り組みを継続し、事故が起きたり効果がないところは撤退しています。このように、行政の道路局の中で、パークレットがしっかりと施策化できており、新しい動きは着実に展開されています。左下の写真は、「サマーストリート」といって夏の間だけ道路を子どもに開放するプログラムです。ニューヨーク市の職員が南米のコロンビアでこのように道を人が使っているのを見て真似をして始めたということなのです。

(写真 19)



(写真 20)



こうしたパブリックスペースにおける活動をオーストラリアのメルボルン市ではモニタリングしています。ど

のようにオープンスペースが整備され、それがどのように変化してきているのかということ。「プレイス・フォー・ピープル（人間のための場所）」という施策の中で10年毎にモニタリングしています（図表 24）。

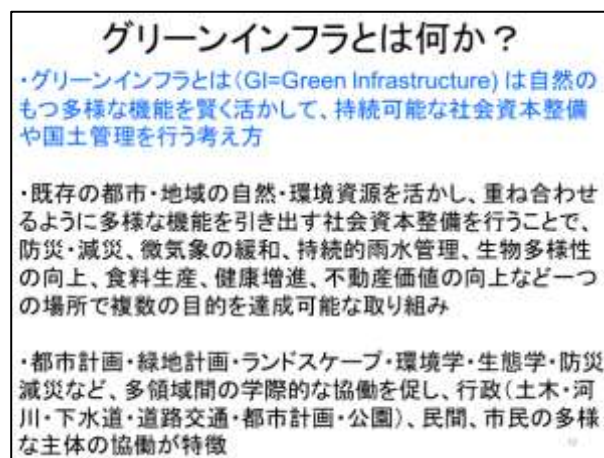
(図表 24)



6. 都市の骨格を創り変えるグリーンインフラ

ようやく、ここから都市の骨格をつくりかえるグリーンインフラについて話をしていきたいと思います。「グリーンインフラ」という言葉には様々な定義や考え方がありますが、私は自然が持っている多様な機能を賢く生かして社会資本整備や国土管理を行う考え方だと思っています。すでに日本の都市は完成していますが、その土地が本来持っている地域資源を活かして、一つの場所で防災減災、微気象の緩和、雨水の管理や生物多様性の向上、健康増進、不動産価値の向上などの目標の達成を目指すものです（図表 25）。

(図表 25)



グリーンインフラは公園緑地課だけではなく、都市計画や下水道、河川、農政、防災など様々な部局に関連するテーマです。グリーンインフラに関する施策・計画や社会実装の検討は、現在様々な自治体で進行中です。日本におけるグリーンインフラの展開ですが、国レベルでは2015年に国土形成計画、それから第四次社会資本整備重点計画の中で「グリーンインフラ」という文言が入りました（図表26）。これは当時、環境省から国土交通省に出向していた人が頑張って入れたのですが、その人達を中心に私たちは一緒にグリーンインフラ研究会を組織し、グリーンインフラというものが、国の政策としても重要度が増しています。同時に現在は、グリーンインフラ社会実装に向けた取り組みが基礎自治体レベルや民間で進んでいます。

（図表26）

グリーンインフラ 日本国内での展開の一部 国レベル ・国土形成計画、第4次社会資本整備重点計画、質の高いインフラ投資推進のためのG7伊勢志摩原則ほか 基礎自治体レベル ・横浜市中期4か年計画(2018-2021) ・横浜市下水道事業中期経営計画(2018-2021) ・横浜市旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会基本構想案(2018) ・世田谷区豪雨対策行動計画(2018-2021) ・守谷市グリーンインフラ推進に関する包括連携協定(2018) 出版物 決定版!グリーンインフラ (日経BP社ほか)

横浜市では、2018年に策定された上位計画である中期4ヶ年計画や下水道の事業中期計画の中に、グリーンインフラを位置付けています。ここには「グレーインフラ」といわれる下水道などグレーの構造物を補完する形で、グリーンインフラがどのように機能するかということが書かれています。熊本市では近い将来に都市緑化フェアが開催されますが、横浜市でも米軍の旧上瀬谷通信施設の跡地で国際園芸博覧会の構想があり、基本構想の中に従来型のインフラ整備でなくグリーンインフラを活かしたまちの骨格を作るという考え方が入っています。私自身が関わっているものには東京都世田谷区の豪雨対策行動計画があります。東京都では23区内の脆弱地域で、重点的な改善地域かが決められていますが、世田谷区では土木課が中心となり、従来型の透水管や地下の貯留施設、調整池などのグレーインフラの整備に加えて、緑地や地

上のオープンスペースを使って、それを流域対策にしていけることを明言化したものです。

また茨城県守谷市では、緑や農地が元々多く残っている自治体なので、市長直轄でグリーンインフラの対策室を作り、1年かけて多部局の職位と協定を結んだコンサルが共同でグリーンインフラのあり方に関する研究会を進めつつ、小さな社会実装も進めているようです。

グリーンインフラというと、どうしても水が浄化される、植物の蒸発散によって都市が冷やされる、生物が増えるなどの「環境的な便益」が強調されます。これは勿論非常に重要な事ですが、「経済的な便益」、グリーンインフラを導入することで、どのように不動産価値が上がるのかなど、それから「社会的な便益」の三つの便益が重要になります（図表27）。昨年度、日本政策投資銀行と、このような価値をどう測るかという事を検討しましたが、定性的な価値をはかるのは非常に難しいということも分かりました。ただ時代は、ESG投資のような流れが急速に伸びていますので、グリーンインフラの環境的・経済的・社会的な便益をはかり、位置付けることがますます重要になります。

（図表27）

グリーンインフラによる便益 ・環境的な便益 (低炭素化、大気質の向上、レクリエーション、効率的な土地利用、健康増進、洪水等水災害からの防御、水源の保全、地下水の涵養、野生生物棲息地の保全、表面流出水の削減等) ・経済的な便益 (ハード施設を中心とするグレーインフラ建設コストの削減、更新期にあるインフラの維持管理、不動産価値の向上、経済・開発の促進、エネルギー使用の削減と効率化等) ・社会的便益 (歩行者空間や自転車アクセスの向上、アメニティの高い歩行者空間や屋上空間を創出し、リハビリの向上や都市緑地の質の向上、持続的雨水管理の市民向け啓蒙・教育、都市のヒートアイランド化の抑制)などがあげられる。

グリーンインフラの対象空間ですが、公園緑地や屋上緑地だけでなく、都市の中の例えば河川や道路、歩行者空間も対象空間になります（図表28）。

事例として、アメリカで最も住みやすい街といわれているポートランド市の中で、まちの骨格を調べているグリーンインフラについて紹介したいと思います。写真21の右下の写真は、ポートランド市の市職員の駐車場です。写真の通り、車での通勤者はほとんどおらず職員の多くは自転車通勤です。ポートランド市では道路の使われ方

(図表 28)



(写真 21)



写真 22 の空間を写真 23 のように改修したのですが、歩行者空間の雨水が 7~80 センチ掘り下げてある緑溝の中に一次的に貯留浸透され、そのオーバーフローがまた次のプランターに流れ、最終的に三つ目のプランターからのオーバーフローが下水道に流れるという仕組みです。豪雨の際に水が流出するタイミングを遅延させることができるのと、一時的な雨水流出抑制ができるのです。ここでは道路の水もプランターに入れており日本では難し

と思いますが、植えられた植物は耐水性があり、1 回雨が降ると少しぐったりしますが、24 時間以内にはで水が抜ける設計になっており、植栽もまた元の状態に戻ります。駐車場でもこのような改修を行い、できるだけその敷地に降った雨水を地中に染み込ませ貯留浸透を促進させるようにしています。

(写真 22)



(写真 23)



初期の頃は写真 24 のように通常の雨樋をはずして、庭に雨水を流すという事をやっています。少し見えにくいですが、これは川を遡上する鮭をモチーフにしたアート・プロジェクトです。単に環境のためにグリーンインフラ をつくりましょう！といっても中々人はついてきませんので、楽しく、小さい予算でこういうことをどんどんやっていこうと市が始めましたそうです。

写真 25 は、公園の中にお椀状の空間があり、周辺の街路で集められた雨水を、一時的に貯留・浸透する生態滞留池です。ここに在来種を基調とした植栽が施されてい

て、雨の時はこれが遊水池として機能しますが、通常時は緑の空間として使われています。

(写真 24)



(写真 25)



写真 26 は、グリーンストリートといわれるもので、い草類の植栽がされています。年間数度の管理という粗放管理になり、植栽としては単純な構成です。ポートランド市内には 1,600 ヶ所以上で整備されており、グリーンインフラの骨格をつくっています。

その他屋上緑地や道路、歩行者空間の脇のグリーンストリートやレインガーデン（アメリカは歩行者空間の面積が広く、歩道上の雨水を集める小さな雨の庭を創出）を作っています（写真 27）。持続的雨水管理の一番のポイントは通常、降雨後に雨水は一気に排水溝や雨水管に流れ込み、調整池へと流出しますが、屋上、建物、庭、道路などの空間を賢く使うことで、雨水流出量や流出速度の遅延などが達成されます。同時に、先程お話ししたように新しい価値を生んでいくことも求められるでしょう。ですから、持続的雨水管理のプロセスとみどりの空

間を掛け合わせることで、それによって多面的な価値を生むことが課題になります。

(写真 26)



(写真 27)



これから再開発や容積率の緩和を行っていく時に、建物の整備要件の中に、どのようにこのグリーンインフラを取り入れていくかという事が必要です。これからは、ただ容積率を緩和して公開空地の面積や緑量の確保だけではなく、その空間の質や機能をどのように評価することも重要となります（図表 29）。

道路でも街路樹の維持管理だけではなく、道路再編の機会を活かして、植栽帯や歩行者空間における雨水管理と健康的な街路樹の育成を推進することも可能だと思います（図表 30）。

(図表 29)



(図表 30)

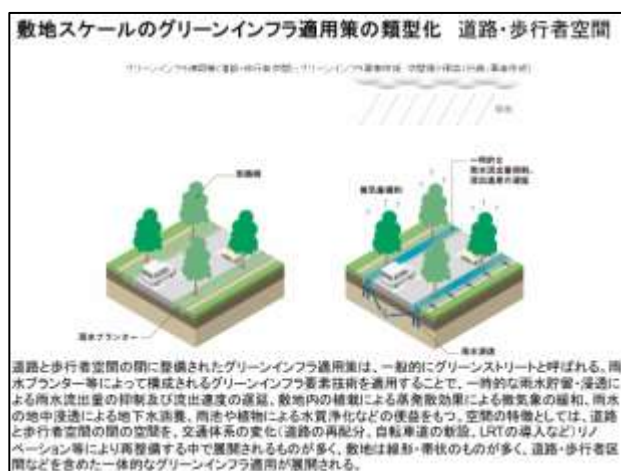


写真 28 は、私が所属していたドイツの事務所で関わっていた、ビシャンパークというシンガポールの都市型河川公園です。元々は河川課が管理する三面張りの排水路のような河川と、公園課が管理する公園が二つに分断されていました。ここではコンクリートの河川から、公園と一体的な氾濫原を内包する都市型河川公園として再整備を行いました。

図表 31 が、断面の比較です。左側が土木の河川標準断面です。右側のように、川幅を広げて、氾濫原として機能を創出すると同時に、自然型の護岸で人々が水に近づけるようにしました。加えて、断面の形態が非常に多様なのがわかったと思います。こうして既存の公園と一体的に河川を再整備することで、防災・減災機能を付加し河川公園の誕生となりました。

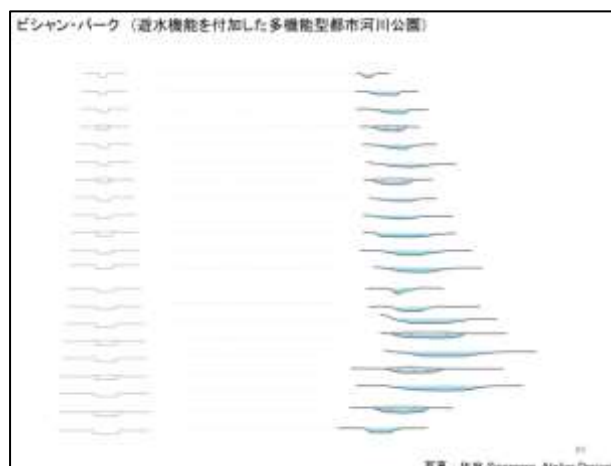
平常時は、多くの子どもたちが川で遊んでいます。シンガポールは日本より降雨量が多く、植物の成長スピードが非常に速いので、生物もすぐ戻ってきます。降雨後

は写真 29 のように氾濫した状態になりますが、これも想定内です。水位が上昇するにしたがって、公園の中でオレンジ色の照明が点滅し、避難するようにアナウンスがされます。少しずつ水位が上がってきますが、こうした仕組みはドイツ式を導入して、シンガポールではモデルプロジェクトとして展開されています。

(写真 28)



(図表 31)



(写真 33)



この川の水をポンプアップして、水を浄化するような事もしています（図表 32）。日本の棚田のように見えますが、土壌の基盤と植物の力を使って、川の水を浄化し

ています。この空間は生物棲息域としても機能する浄化ビオトープというものです。

(図表 32)



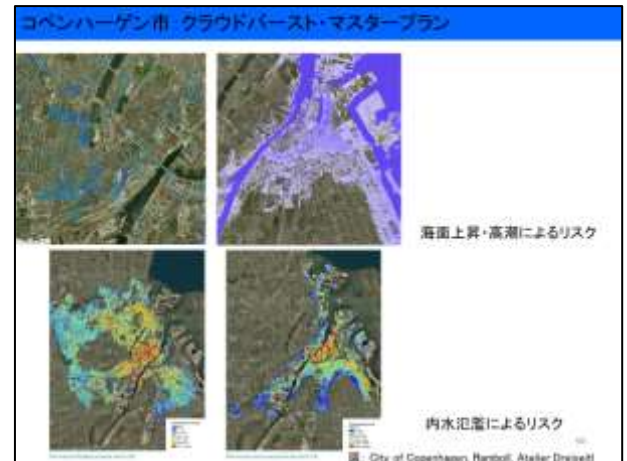
ビシャンパーク整備の結果として、周辺に立地する公営と民間の集合住宅の不動産価値が向上したというデータがあります。構想当時は反対もありましたが、現在はこのようなプロジェクトの建設を望む要望が沢山でいるようです(図表 33)。

(図表 33)



デンマークのコペンハーゲン市では非常に大きなゲリラ豪雨の影響で、街の旧市街地が甚大な水害に見舞われました。図表 34 は、コペンハーゲン市旧市街地の脆弱性を視覚化したものですが、上半分の図が海面上昇による高潮によるリスクで、下半分の図が内水氾濫によるリスクです。海側からも陸側からも脆弱なコペンハーゲン市では「クラウドバースト・マスタープラン」を策定し、豪雨に対する都市計画的な施策を展開しています。クラウドバースト・マスタープランのポイントは、微高地でグリーンインフラを導入する場所を特定している点です。

(図表 34)



内水氾濫に効果の出やすいエリアを選定し、特にその街区や道路、歩行者空間において今後再整備や改修の計画がある場所では積極的に導入が進んでいます。図表 35 にあるように、ここは全て道路でしたが、車も自転車も人も水も共有する場所ということで、実験的ではありますがクラウドバーストの社会実装が構想されています。市内では施策の展開と同時に、いくつもモデルプロジェクトが整備されています。コペンハーゲンの旧市街には非常に古い歴史的な建物が建ち並び、オープンスペースを新たに整備できる場所がありません。ですから、道路空間を活用し、歩道は残した上で帯状の緑地(氾濫原)を創出し、一時的な雨水の貯留浸透機能をもつグリーンインフラを整備する予定です。

(図表 35)



7. みどりの場所を共有し育てる-神戸市東遊園地 URBAN PICNIC-

最後に「人」についてお話ししたいと思います。私が神戸に住んでいる時に関わってきた神戸市の東遊園地という公園で行われていることを中心に、人がどのようにオープンスペースに関われるかということをお話ししていきたいと思います。写真30は、6〜7年前のゴールデンウィークの非常に天気がいい日の東遊園地の光景です。背後に神戸市役所がそびえたっていますが、この公園が使われていないのはもったいないということで、地元の工務店の社長さんや市民の有志による「URBAN PICNIC（アーバンピクニック）」という社会実験が始まりました（図表36）。元々、東遊園地というのは外国人居留地に隣接しており、彼らの要望によって作られた遊園地で、ここでスポーツをしたりレクリエーションをしたりする場所でした。この公園が再び、周辺で暮らし、働き、学ぶ人たちにとって魅力的なアウトドアリビングになるような、公園を起点に町の価値を高めることを目指しました。最初はグレーの舗装部分だけで社会実験が行われました。

（写真30）



公園内の小さな舗装空間に借りてきた芝を張り、2週間だけカフェやアウトドアライブラリーを開いて、どれだけ人が来るかというのを見ました。驚くべきことに、周辺のマンション住民をはじめ、沢山の人が公園に集まるようになったのです。これを見た神戸市長が「これは選挙対策で使える」と思ったのかはわかりませんが、当初あまり協力的でなかった神戸市も、次年度は土のグラウンドの芝生化の実験を遂行しました。土のグラウンドにここに13種類の芝を植えて、踏圧の実験を行う

という目的で芝生化の実験を実施したことで、社会実験の範囲が広がりました。結果として2〜3年経つと、市民の方たちが、芝生の上でゆっくり友達と話をしたり、ご飯を食べたり、子供を遊ばせたりという風景が定着するようになります。

（図表36）



写真31は、4年目の2018年の風景です。このような社会実験を展開するために、財源は企業の協賛と市からの受託事業費、助成金を3割ずつになっています。図表37は社会実験開始からのタイムラインですが、社会実験を運営している一般社団法人リバブルシティイニシアティブの自主プログラムがあります。神戸の雰囲気合う食や音楽などのプログラムを実施しています。一番特徴的なのは市民が自分たちで応募し、公園でプログラムを展開する公募プログラムの仕組みです。ウェブサイト上で、何月何日にパークヨガのプログラムを実施したいなど、応募できるようになっています。基本的にはお金は500円以下の材料費しか取れませんが、実に沢山の団体がここで自主プログラム、公募プログラムを実践しています。

（写真31）



(図表 37)

神戸・東遊園地 UPのタイムライン	
・2015年	神戸パークマネジメント社会実験実行委員会と神戸市の共催でUP開催。
・2016年	6月中旬～11月上旬 長期社会実験UP開催（神戸市は芝生化の実験を行う）
・2017年	同時期にUPを開催。 →11月、31回の自主プログラムの企画運営（芝生の演奏会、乾本のタペ、ワインピクニックなど） →18主体による、14回の公募プログラムを実施（パークヨガなど） →76回の育てるプログラムを実施。（公園プログラムの運営補助、チョーク消し、塗装や机づくりなど）→運営側に参加する市民を増やす →フレンズ 27名認定 本の寄贈、育てるプログラムへの参加、ガイドツアーへの参加、東遊園地検定への合格の4点をクリアした市民を認定
・2018年	金・土・日に限定して4回日の社会実験を開始

社会実験を展開する中で、様々な気づきがありました。例えば地元の南京町(中華街)で働いての方が毎朝公園で太極拳の練習をしていたのですが、公募プログラムに応募して頂き、より多くの市民と体験を共有して頂きました(写真 32)。「公園を市民のステージに」ということです。ですから、私たちも面白い市民プレイヤーの方たちを探しにいき、プログラムを実施して頂いたりということもありました。

(写真 32)



写真 33 は、私が神戸大学にいたときの学生です。まちの事をやりたいという学生が、この公園でカフェの店員として働き、ある時間は子供と遊んだり、設営準備で椅子を並べたり、それから運営のお手伝いをしたり、1人で何役もこなすようなマネジメント人材として活躍しました。ちなみに彼は不動産会社、彼女は広告代理店に就職しました。学生や若い人の中にはまちの事に関わりを持ちたいと思っている人は多いと思います。そういう機会を作ってあげることも重要だと思っています。

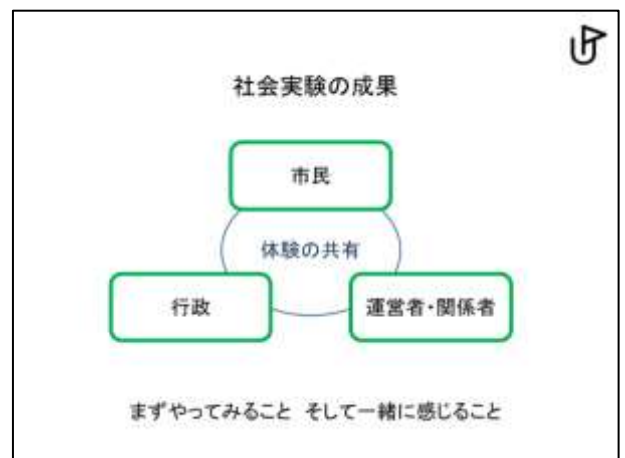
(写真 33)



現在、関西圏の二つの自治体でこの建物がまた違う形でそのまちの公園で再利用され、URBAN PICNIC というイベントやムーブメントが他の場所にも連鎖を生んでいるのは、非常に面白いと思っています。

成果として、市民と行政と運営関係者である私たちがまずこの成功体験をこの場所を通じて共有できたことがあげられます(図表 38)。私たちは最終的に公園に賑わいを作りたいのではなく、公園を良くしたいのでもなく、まちのことを良くするために公園を使いたいと考えています。ですから世界一住みやすい都市、メルボルン市の都市計画職員を呼んだ際は公園の中でフォーラムを開き、神戸市の職員や市民と一緒に青空の下で議論を行いました(写真 34)。このような活動を通じて、神戸にとって住みやすさとは何なのか、や神戸という都市に固有な魅力の磨き方についても議論を続けてきました。結果として神戸市の職員のなかにも、実験的な機運が生まれて始めていると感じています。

(図表 38)

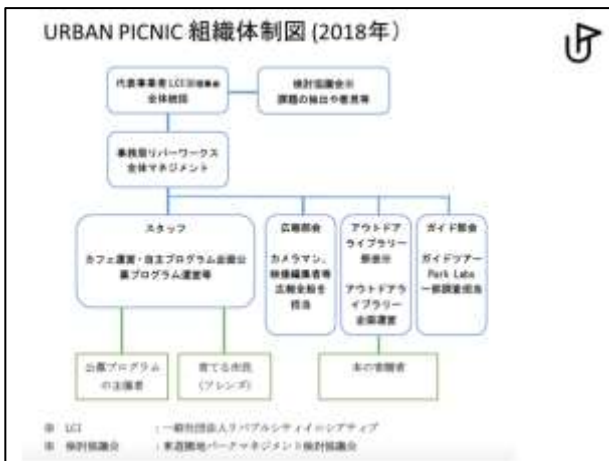


(写真 34)



図表 39 は、URBAN PICNIC という社会実験の組織体制図です。事業者とカフェのスタッフや広報部会、ライブラリーの運営などがありますが、コアで大体 4~50 人の市民の方たちが少しだけ自分たちの時間を使って関わっています。それから公園のファンのような方たちがその周りにおられて、100~200 人の人たちが、何かあると必ず参加して協力してくれます。公園の活動が盛り上がれば盛り上がるほど排他的になる可能性もありますので、いつも違う試みに挑戦したり、新しい市民の参加を促したり試行錯誤しながら取り組んでいます。

(図表 39)



URBAN PICNIC の社会実験の隣では、また別の社会実験が展開されています。神戸市の農政局と協力した、「EAT LOCAL KOBE」というものです。神戸市内で営農する農家さんに参加してもらい、季節が良い5月から10月の土日にファーマーズマーケットが開催されています(写真 35)。

(写真 35)



通常のファーマーズマーケットは、ただそこで野菜を買って終わりですが、このファーマーズマーケットでは、そこで野菜を買って、調理されたものを食べたり、生産者さんと話すこともできます。また、ファーマーズマーケットを契機に神戸市内の生産者を市民が訪れるような交流も生まれているとのこと。この社会実験は大変成功しており、本設に移行してゆきました。

このように使われていない公園やオープンスペースが日本全国に沢山あると思いますが、そうした場所をどのように市民が関われる場所に変えていくかが大事だと思っています。ここ熊本でも屋外公共空間におけるイベントは沢山行われていると思いますが、消費ではなく、どれだけ多くの市民の人たちが主体的に「森の都」を育てることに関われるかは重要な点だと思います。

8. グリーンインフラを活かした住みやすい都市づくり

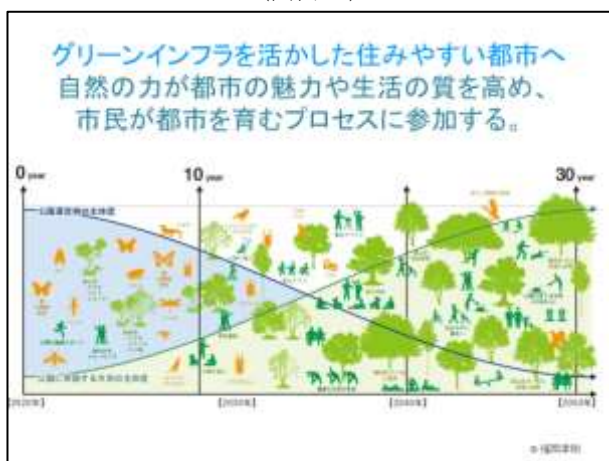
これまでグリーンインフラの話をしてきました。小さい場所やスケールから積み上げる「プレイスメイキング」という話と、都市のグリーンインフラの話は、一見全く異なる話のように聞こえるのですが、熊本市内にある多様なポテンシャルを持った場所を活かして、どのような方向に舵取りをしてゆきたいのでしょうか？例えば、歩きやすい町や健康・スポーツなのか、生物多様性なのか、コミュニティを作ることなのか、もしくは文化的な場所なのか、それはその場所が立地する特性によっても違うと思いますし、地域や商店街、町の地区の人たちが持っている力によっても変わると思います(図表 40)。こうした小さい場所から多面的な価値を創出し、積み上げてゆくボトムアップのアプローチを継続することで、

図表 41 のように、公園に参加する市民の主体度が上がると、公園運営側の主体度がクロスして下がっていくようなことも起こると予想されます。公園やオープンスペースというものはそこに生活する市民誰でも関われるはずですが、なぜか多くの人は公園の管理は行政がやるものだと考えています。木の葉が落ちると苦情を言うような市民を減らすためには、どのようにして、こうした自然＝熊本の「森の都」空間に市民が関わる機会をつくっていくのが非常に重要です。市民が都市を育むプロセスに参加する中で、オープンスペースやみどりの場所をどう活かすかという視点が生まれてくるのではないのでしょうか。これは熊本だけでなく日本中どここの自治体にも共通する課題です。

(図表 40)



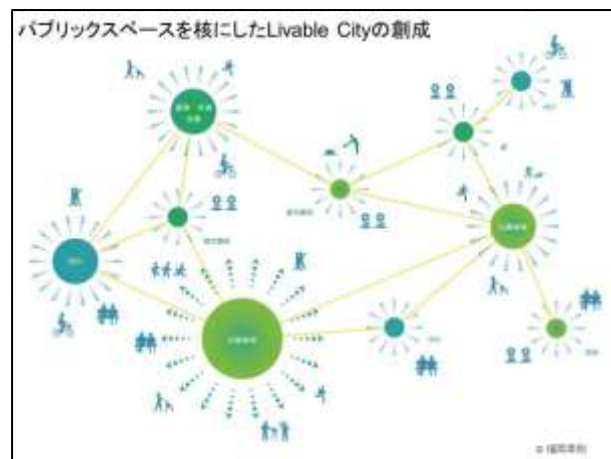
(図表 41)



こうした場所を戦略的に起動させることができれば、（熊本では江津湖周辺や熊本城周辺、花畑広場なのかもしれません）うまく屋外公共空間を起点とした市民の活動が連鎖して、都市に変化が起きるかもしれませんし、失敗するかもしれません。まずは少しずつオープンスペ

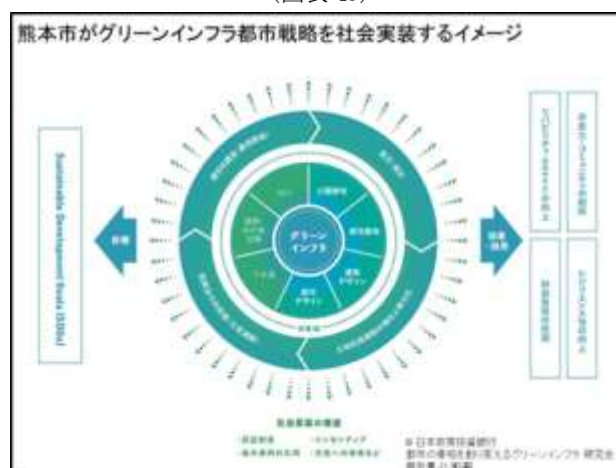
ースから都市を考える事で、住みやすい都市というものに一歩近づけるのかなと思います（図表 42）。

(図表 42)



同時に、熊本市がトップダウンでグリーンインフラを社会実装する場合、どのようなやり方があるかという事ですが、図表 43 は、昨年度に日本政策投資銀行と共に開催した研究会で作ったアウトプットの 1 つです。例えば、熊本市が持つべき SDG s の目標や、レジリエンスを高める、財政負担を低減、住みやすさを上げるなどの大きな目標に対して公園緑地課、河川課、農政課、建築、都市、下水道、それから市民関係の課、そうした全ての行政職員たちとグリーンインフラ施策や事業を入れ込めるのがこれからの基礎自治体にとっても非常に重要になると予測されます。

(図表 43)



海外の様々な自治体の取組みを見ていますと、例えば米国のフィラデルフィア市では上下水道部に 300 人ほど職員がいる中で、グリーンインフラを担当しているのは 5 人ほどです。彼らはグリーンインフラの業務を全て

自分達で抱えるのではなく、戦略をつくり多部局のグリーンインフラ 事業を展開することを意識しています。企画構想、計画設計技術、施工、管理運営などグリーンインフラの計画から実装までのあらゆる段階で部局間横断で調整や交渉を進めたり、民間企業の再開発に対して折衝できるような、コミュニケーション能力や交渉・調整力が高く、領域横断思考の強い職員が配されているということです。今日は、下水道や道路、都市計画の部局の方も来られているということですから、グリーンインフラの施策や事業を既存の業務や施策の中に、どのように入れ込めるかを考えると同時に、新しい取り組みを展開できる戦略をもつことが大事です。そうしたグリーンインフラの取り組みが究極的にはどのようにして「森の都」に繋がるのかをぜひ考えていただけたら良いかと思います。

最後に都市のパブリックオープンスペースというのは市民誰でもアクセスできる場所です、一つ一つの場所が良くなることも勿論大事ですが、その繋がりをグリーンインフラにつなげて、そこに生活する人がその場所を育むことに関わることが住みやすい「森の都」熊本をつくることに繋がるのではないかという言葉で本日の私の講演は終わらせて頂きたいと思います（図表 44）。本日はご清聴頂きましてありがとうございます。

（図表 44）

